

髪の毛の魔力



星田 理

エッセイスト

年を取るにつれて髪の毛が気になってくる。私も若いころはバリバリの髪をしていた。朝起きると寝癖が付いていて、その髪を直すのに苦労したものだ。今では残り少なくなった髪の手入りに、かえって余計な時間がかかる。女房は私の頭を見て、「すっかり^{きび}淋しくなったわね」と言う。だが俺だって、若いころは真っ黒い髪がいっぱいあって、手入れが大変だったんだ。

この間、久しぶりにS君に会った。会った瞬間、あれっ、と思った。顔が小さく見えたのである。「前と感じが変わったなあ」と言うと、頭に手を当て「これこれ」と言って、にやりと笑った。髪が急に黒々となったので、すっかり若返った感じだ。変身した彼は前に比べると元気そうに見えた。

近くに文房具店がある。ビデオ、CDも置いてある。遅くまでやっているの、ぶらりと出かける。店に入って、並んでいる棚を見ているうちに、ふと目に入った。それは古いアメリカ映画であった。昭和三十年代の中ごろのもの、まだハイテクのなかった時代のスペクタクル映画であった。偶然とはいえ、掘り出し物を見つけた感じだった。古代ギリシャの怪力の持ち主、サムソンを描いた神話であった。

ストーリーをかい摘んで言うと、こうである。彼は遊牧民として平和に暮らしていたが、領主の権力が強くなり、彼らの土地を取り上げようとした。サムソンは仲間を守るために戦った。彼の武器として手に持っているのは、羊の顎の骨だけである。だが彼の体には不思議な魔力が潜んでいた。領主の軍隊は兜と鎧を身に付け槍と刀で戦ったが、サムソンにはなぜか勝つことができなかった。そんな馬鹿げた話があるかと、領主はさらに兵を向けたが、結果は同じだった。

領主は、サムソンに不思議な魔力が潜んでいることに気が付き、その秘密を探らせるために、一人の美女を遊牧民の中に潜り込ませた。女は、領主が土地を取り上げることを止めたと言った嘘を言って、サムソンに近づき、都の甘い生活に誘った。サムソンは女の甘い魅力に取り付かれ、いつしか

恋心を持つようになった。そんなある日、気を許したサムソンは、不用意にも自分の秘密を話してしまう。魔力の秘密は、サムソンの黒髪にあった。それを知った女は、ある夜、サムソンを泥酔させ、長い黒い髪を、ぱっさりと鋏で切った。

髪を切られ、魔力を失ったサムソンは捕まり、火箸で目を焼かれ、奴隷にされた。毎日、穴倉で石臼を挽かされ、働く日が続いた。ある宮中の祭りの日、サムソンは大神殿の柱に縛り付けられ、観客の見世物にさらされる。だがその時すでに、彼の頭には、黒々とした髪が蘇っていたのである。領主はそれには気が付いていなかった。宮中の祭りが、最高潮に達した時だった。柱に縛り付けられていた彼は祈った。「神よ、私に最後の力を与えたまえ」。にわかに空が暗くなり雷鳴がとどろき、嵐となった。彼は、縛られた手を宮殿の柱に当て、力を入れた。すると巨大な宮殿の柱が、じりっ、じりっ動き出し、次々とすさまじい音を立てて崩れ落ちていくのである。領主も観客も、そしてサムソンも、すべてのものが石の下敷きになって押し潰されてしまう。これが初めて見たトリック映画だった。壮絶な場面に息をのんだ。

これは「サムソンとデリラ」という映画である。往年の映画ファンなら、誰でも知っている名画である。監督は、セシル・デミル。主演男優は、ビクター・マアーチャである。ハリウッド映画の傑作の一つである。まだハイテクのなかった時代のトリック場面が当時の映画ファンの中で話題になったものだ。だが、別な角度から見れば、ギリシャ神話の怪力男サムソンの秘密が黒髪にあったということが、私にとっては面白かった。

髪に魔力があったというのは映画の中だけの話であるが、髪というものは、いつの時代にも人間にとって美の象徴であり、活力の源になっていると言える。最近、手軽に髪の色を変えることができる。サッカーの選手や野球選手の中に、黒髪を金髪に染めた人をよく見かける。皆と違った金髪に染めるのだから、度胸もいるはずだが、何か訳がありそうだ。髪の色を変える彼らにとっては、

何かに行き詰まって、気持ちを切り替えたいという、そんな願いがあつてのことだろうか。気合だあーと、気分転換しようとする彼らの気概が伝わってくるような気がする。

スポーツ選手の金髪の第1号は、確か、冬季長野オリンピックの原田選手だったと記憶している。彼は、その4年前のドイツで行われた冬季オリンピックで、金メダルが確定的だった。だが失敗してしまった。苦渋の4年が経った。長野では失敗は二度と許されなかった。オリンピックに向けて、彼は気持ちを切り変えた。ついに、ジャンプ団体戦で念願の金メダルを取った。雪の降りしきる中、涙でクシャクシャになって、船木に抱きついて泣いた。

五木寛之さんが「こころの羅針盤」という本の中で、作家のエッセイを紹介している。その中に、直木賞作家の浅田次郎さんの作品がある。髪についてこう書いておられる。彼は若いころ、剛毛だったそうだ。柳屋ポマードと丹頂チックで、髪をバリバリに固めていた時代があったという、髪への思いを書いているが、ポマード、チックとは懐かしい話である。彼は言う。髪が薄くなったのは、自己管理を決して怠ったからではない、むしろ、誇り高き男の「徹し」として考えるべきであると。髪を毛の抜ける思いで頑張ってきた、日々の精進を怠らずにやってきた。その証であるとして書いておられる。

ちょっと悔しいが、私も全く同感なのである。

profile

星田理 ほしだ おさむ

1937年京極町生まれ。'61年北海学園大学卒。北海道開発局札幌開発建設部をスタートに本局、網走開発建設部などを経て留萌開発建設部調査官、'92年退官後は民間勤務。現在は業界月刊誌にエッセイ連載中。囲碁四段。家族：妻、中国新疆ウイグル自治区出身の青年。
